

居場所あるよ 自由な学校

何するか子どもにお任せ

横浜市の小学校で校長も務めた渡辺正彦さん(69)は在職中、不登校や発達障害など様々な個性を持った子どもの居場所が、学校内に足りないと感じていた。個性を大切に、地域でのびのびと育つ場を作りたい。そんな思いから退職後、小さく自由な学校を作った。

元小学校校長 横浜に開設



校長の渡辺正彦さんと、奥の三子さん。右奥には野菜が植わり、左奥には鶏小屋。その奥にコンテナを改装した部屋がある。のんびりとした雰囲気だ。横浜市青葉区

東急青葉台駅から歩いて20分ほど。「横浜みどりの学校ひまわり」は、恩田川沿いの田畑に囲まれたのどかな一角にある。貨物コンテナを改装した手作り感あふれる部屋は、以前は造園会社の休憩室だった。室内には漫画本やテレビゲームが並ぶ。

渡辺さんが「ひまわり」を開いたのは5年前。体調を崩し、今は毎週水曜日と土曜日だけ開いている。水曜日の午前11時過ぎ、子どもたちが集まってきた。渡辺さんの妻で、やはり元小学校教諭の三子さん(64)に自分で作ったヘチマたわしを見せたり、畑仕事の話をしたり。やがてテレビゲームを始めた。

しばらくすると、三子さんが屋外に敷物を広げ、子どもに付き添って来た母親2人と一緒に趣味のヨガを始めた。「お母さんのリラックスも大事だから」と三子さん。ゲームをしていた男の子が1人、外に出て畑仕事を始めた。いつ来て何をするかは、子どもに委ねられている。渡辺さんは「ゲームも、一緒に遊んだり順番を

決めたりして人と関わる良いツール」。子どもたちを遠巻きに見守りながら、ときおり声をかける。お昼はそれぞれが持ってきた弁当と一緒に食べ、トランプをしたりして過ごす。子どもの自主性を尊重しながら、集団で過ごす時間を取るようになっている。小学5年の男の子(11)は、3年生の頃から学校に行きづらくなった。今は

保健室に登校しながら、水曜日だけ早退して来てくれる。畑仕事や鶏の世話をするのが楽しいのだという。「決まったことじゃなくて、自分で考えてなんでもできるのが楽しい。学校とは違う」と話す。母親も「学校にはとても配慮してもらっているが、週1回ここで気を抜けるようで、とてもありがたい」と言う。

教室なじみづら子 のびのび育てたい

渡辺さんは子どもの頃、学校になじめず劣等感があつた。先生に頭ごなしに叱られたり馬鹿にされたり。珍しく褒められた時のうれしさも覚えていた。

最後は青葉区のさつきが丘小学校で校長を9年間務めた。校長室に自作のパチンコ台を置き、子どもがいつでも入れるようにした。最初は物珍しさからたくさん子どもが来た。やがて数は減るが、来続ける子たちがいる。友達との交流がうまくできない子や、教室に居場所が無い子が集まっていることに気がついた。

校内の廊下に段ボール箱をもと向き合いたいと思うようになった。「使用中」と札をつけ置き、カッとした時に入り、気持ちを落ち着ける場所。1人になる時間が必要だと思つた。

学校になじまない子にいろいろ工夫をした。でもさすがに教室を出て行ってよいとは言えない。廊下は走っちゃダメ。授業時間も決まっていな。発達上の課題がある子が適応しづらいルールがたくさんある。

「苦手なことを無理にさせると、いいところを伸ばしてやりたい」。退職後は、公立学校とは違うやり方で子どもに接したいと思つた。11年3月に退職。同年6月に、校長を務めた学校の近くにひまわりを開いた。畑仕事や鶏の世話、ゲーム、勉強をしながら子どもたちと向き合う。やってくるのは不登校や、発達障害傾向のある子。学校と並行して来る子もいれば、ほとんど登校しない子もいる。

だから28歳で先生になると、学校になじめづら子に気を配った。休み時間には元気な子が先生を囲む。集まってくる子らの肩越しに、その後ろで1人である子の様子をうかがった。

発達障害という言葉が知られ始めた時期。個性とも言えそうな特徴に診断名がつく風潮には、違和感もあった。だがそんな特徴のある子は確かに学校にいた。

「みんな一斉に同じことをするのはなく、富士山に登るのにいろいろな登り方があるのと同じです」

「横浜みどりの学校ひまわり」は、横浜市青葉区しらとり台81番地。水曜日と土曜日の午前11時〜午後3時。会費は回数に応じて月1千〜3千円。問い合わせは渡辺さん(090・9201・3992)へ。

「私は学校出身なので学校に戻れば一番いいと思う。でも無理に行かなくても、子どもにとって苦痛な状態は除きたい」と渡辺さん。個性を大事に、自立して生きて行く力をつけたいと考えている。

校長の渡辺正彦さんと、奥の三子さん。右奥には野菜が植わり、左奥には鶏小屋。その奥にコンテナを改装した部屋がある。のんびりとした雰囲気だ。横浜市青葉区

「苦手なことを無理にさせると、いいところを伸ばしてやりたい」。退職後は、公立学校とは違うやり方で子どもに接したいと思つた。

「私は学校出身なので学校に戻れば一番いいと思う。でも無理に行かなくても、子どもにとって苦痛な状態は除きたい」と渡辺さん。個性を大事に、自立して生きて行く力をつけたいと考えている。

「みんな一斉に同じことをするのはなく、富士山に登るのにいろいろな登り方があるのと同じです」

(太田泉生)